

# 随

# 想

## 自分の感受性くらい——

先日、高校生の長女と映画を観に行きました。上映後、館内が明るくなり隣を見ると、娘の頬に涙の痕。確かに評判通り良い映画でした。何より映像が美しく、多彩なカメラワークが登場人物の心象風景を効果的に描いていて、音楽も印象的でした。

しかし、いったい彼女はどのシーンで泣いたのだろう。いやいや、切ない場面はいくつもあった。どこで泣いてもおかしくない。私が感情移入しきれていなかっただけなのだ。

中学・高校で国語を担当する身としては、十代の感性に疎くなっただけとはいけないと常日頃から意識しているつもりです。もちろん授業での作品読解に限らず、日常生活の中で、十二歳から十八歳、それぞれの中のリアルな心——それは自己意識だったり、ある種の無力感だったり、焦燥感だったり、時に現れる万能感だったり、高揚感だったり——に共感できる感受性は決して失って

はいけないと自戒しています。けれど、豊かすぎる感受性は心の疲労を生むからなのか、油断するとうつっぽい鈍感な世渡り上手な自分が頭をもたげてしまいます。しかも、長男が大学生になった今、十代どころか「中高生の親」の心の揺らぎすら、ともすると忘れてしまいがちそうになっているのではないか、そんな危惧すら湧いてしまいます。

映画からの帰り道、詩人・茨木のり子の言葉を改めて噛みしめました。

自分の感受性くらい

自分で守れ

ばかものよ

